

愛媛県内ラグビー競技人口の推移

【概要】

- 県内の競技人口は1990年頃のピーク期からほぼ半減し、2022年度で800人程度（表1、図1上図）。
- ピーク期の競技人口において多数を占めていた高校とクラブの減少が著しい（図1下図）。
- 高校競技人口の減少率は、少子化による減少率とおおむね対応している（【詳細】で説明）。
- 一方、スクールや中学は一定の人数をキープしている（図1下図）。
- 大学や高専も漸減傾向にある（図1下図）。

表1 愛媛県内ラグビー競技人口の推移

年度	1984	1987	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	備考
スクール	60	60	149	144	113	150	不明	128	124	165	166	137	150	135	126	140	132	152	赤字は1984年度値からの推定値
中学・ジュニア	43	109	129	125	117	131	不明	139	145	135	142	130	124	130	125	120	130	134	
高校	524	659	465	474	414	473	414	437	408	415	393	414	389	377	363	346	365	266	
高専	58	56	37	49	24	33	不明	25	25	29	28	24	33	24	31	20	19	22	
大学	89	90	75	84	77	93	不明	78	78	79	42	51	24	44	42	70	66	52	
クラブ・社会人	?	538	329	313	289	252	不明	251	217	230	217	178	141	112	106	99	93	138	
女子								1	18	23	31	38	14	23	20	17	31	18	
合計	?	1,512	1,184	1,189	1,034	1,132	不明	1,059	1,015	1,076	1,019	972	875	845	813	812	836	782	

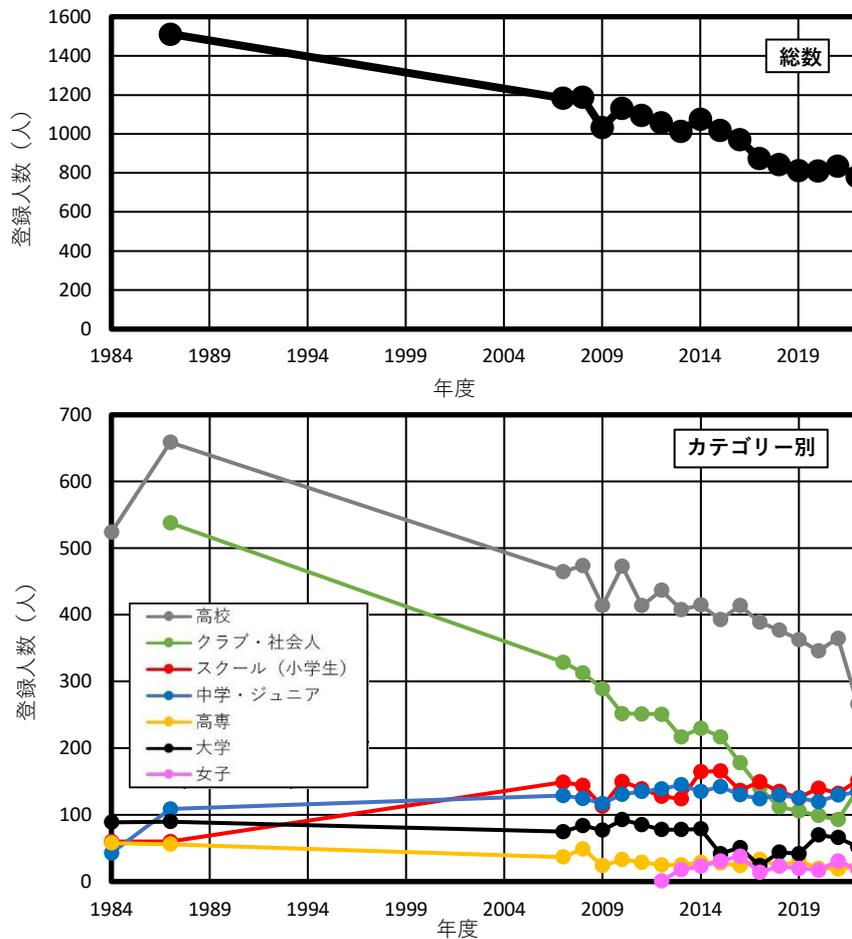


図1 愛媛県内ラグビー競技人口の推移

【詳細】

- データが残っている範囲で、県内競技人口（総数）の最大値は1987年度の約1,500人（表1）。
- 全国の高体連登録者数（ラグビー）のピークが1991年度である（図2）ことから、愛媛県の競技人口のピークも1990年頃であると考えられ、1,600人程度と推定する。
- 総数は2016年度に1,000人を下回って以降、減少が加速し、現在は800人前後で横ばい状態（表1、図1上図）。ピーク期からほぼ半減している。
- ピーク期に多数を占めていたカテゴリーは高校とクラブであるが、ともにその後の減少が著しい（図1下図）。高校は1987年度→2022年度で約4割に、クラブは4分の1に減少している（表1）。
- もう少し詳しく見ると、県内の高校の競技人口は、1987年度から2007年度にかけて、659人→465人と29%の減少である（表2）。文部科学省の学校基本調査によると、全国の高校在学者数のピークは1989年度であり、その後は減少傾向にある（図3の紺色点線）。1987年度から2007年度にかけては、538万人→340万人と37%の減少であり（表2）、県内高校競技人口の減少率よりも大きく、県内高校競技人口減少の主たる原因は少子化であると考えられる。
- 県内高校競技人口は、2007年度以降もほぼ同じ割合で減少している（図1下図）。ここで、図3を詳しく見ると、2007年以降の10年間の高校生の減少傾向は、1990～2007年にかけての減少傾向に比べて緩やかであることがわかる。減少傾向が緩やかになっているのは団塊の世代の孫世代に起因するものではないかと考える。2007年度以降、高校生の数が大きく減ってはいないのに、県内高校競技人口は以前と同じ割合で減少している。これは、ラグビーをプレーする高校生の割合が減少していることを意味するのではないかと考える。1980年代以降、ウエイトトレーニングが本格的に取り入れられ選手の体格が急激に向上し、体格差に起因して大差がつくゲームが多発するようになったと感じる。また日本代表の活躍により、ワールドカップで大男がぶつかりあう姿を一般の方が目にする機会も多くなった。こうしたことから、「自分にはできないスポーツだ。」「子供にはさせたくない。」と尻込みさせてしまい、高校でラグビーを始める生徒を減少させてしまっているのではなかろうか。2016年度以降は減少率がさらに増しているように見える。少子化が再び進行し始めたことに加えて、ここ数年はコロナの影響であることは間違いないであろう。
- クラブも高校と同様に減少している。さらに2009年度以降は減少が著しい（図1下図）。これは、前述したように体格の向上に伴ってラグビーが体力的にきつい（換言すると、多くの人気が軽にはプレーできない）スポーツとなってきたことに加えて、県内のクラブチームは高校OBチームが多く、人数の減少に伴いチームが活動を停止してしまい、再編がうまく進んでいないことも一因ではなかろうか。
- 一方、スクールや中学は一定の人数をキープしている。これは、1990年代にスクールの数が増え（小松は1991年、宇摩は1995年の設立）、スクールの競技人口が増加した（図2）ことが第1の理由であろう。加えて、
 - ・スクールレベルにおける選手確保に関する関係者の努力
 - ・スクール（小学生）においては、前述のような体格差に起因する懸念は少ないのではないか
 - ・中学では、北条北、城西、愛光において、ラグビー経験を有する顧問が途切れることなく在籍しており、継続的に選手勧誘が行われていることというような理由が考えられる。
- しかし、今後さらに少子化が進むと思われる（図3）こと、現在の中学の指導者（教員）の多くが退職時期を迎えているにも関わらず後進の育成が進んでいないこと等から、中学においても、今後の競技人口の維持については懸念が残る。

表2 愛媛県内における高校ラグビー競技人口の減少率 [1987年度を基準]

	1987年度	2007年度	2022年度
全国の高校在学者数	538万人	340万人 (▲37%)	296万人 (▲45%)
県内高校ラグビー部 在籍者数	659人	465人 (▲29%)	266人 (▲60%)

括弧内は1987年度に対する減少率

表3 愛媛県内ラグビー競技人口の推移 [スクール、中学・ジュニア詳細]

年度	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022			
スクール	松山RS (小学生)	50	不明	35	51	不明	38	46	48	51	41	39	38	33	28	29	45	2015からは松山RS人数の2/3	
	北条RS	16	不明	18	24	不明	28	30	36	40	42	41	26	26	47	51	51		
	宇摩RS	60	不明	43	48	不明	43	26	60	54	33	38	30	32	29	20	20		
	小松RS	23	不明	17	27	不明	19	22	21	21	21	32	41	35	36	32	36		
	小学生小計	149	144	113	150	不明	128	124	165	166	137	150	135	126	140	132	152		
中学・ジュニア	愛光中	26	不明	9	30	不明	23	31	28	16	20	10	15	17	21	17	20		
	城西中	20	不明	28	17	不明	29	24	24	20	23	30	26	27	20	16	9		
	北条北中	29	不明	29	31	不明	33	37	32	34	26	30	38	34	29	28	33		
		中学小計	75	不明	66	78	不明	85	92	84	70	69	70	79	78	70	61	62	
		宇摩ジュニアRS	34	不明	31	30	不明	30	29	26	47	41	35	32	31	28	40	30	
		愛媛ジュニアRS	17	不明	18	15	不明	17	14	14									2015から松山RSで登録
		松大シャークス				8	不明	7	10	11									2015から松山RSで登録
		松山RS (中学生)									25	20	19	19	16	14	15	22	松山RSの人数の1/3の数値
		西条ユナイテッドユース	3	不明	2	0	不明												2020から小松ジュニアで登録
		小松ジュニアRS														8	14	20	
	ジュニア小計	54	不明	51	53	不明	54	53	51	72	61	54	51	47	50	69	72		
	中学・ジュニア計	129	125	117	131	不明	139	145	135	142	130	124	130	125	120	130	134		
高校	465	474	414	473	414	437	408	415	393	414	389	377	363	346	365	266			
高専	37	49	24	33	不明	25	25	29	28	24	33	24	31	20	19	22			
大学	75	84	77	93	不明	78	78	79	42	51	24	44	42	70	66	52			
クラブ・社会人	329	313	289	252	不明	251	217	230	217	178	141	112	106	99	93	138			
女子						1	18	23	31	38	14	23	20	17	31	18			
合計	1,184	1,189	1,034	1,132	不明	1,059	1,015	1,076	1,019	972	875	845	813	812	836	782			

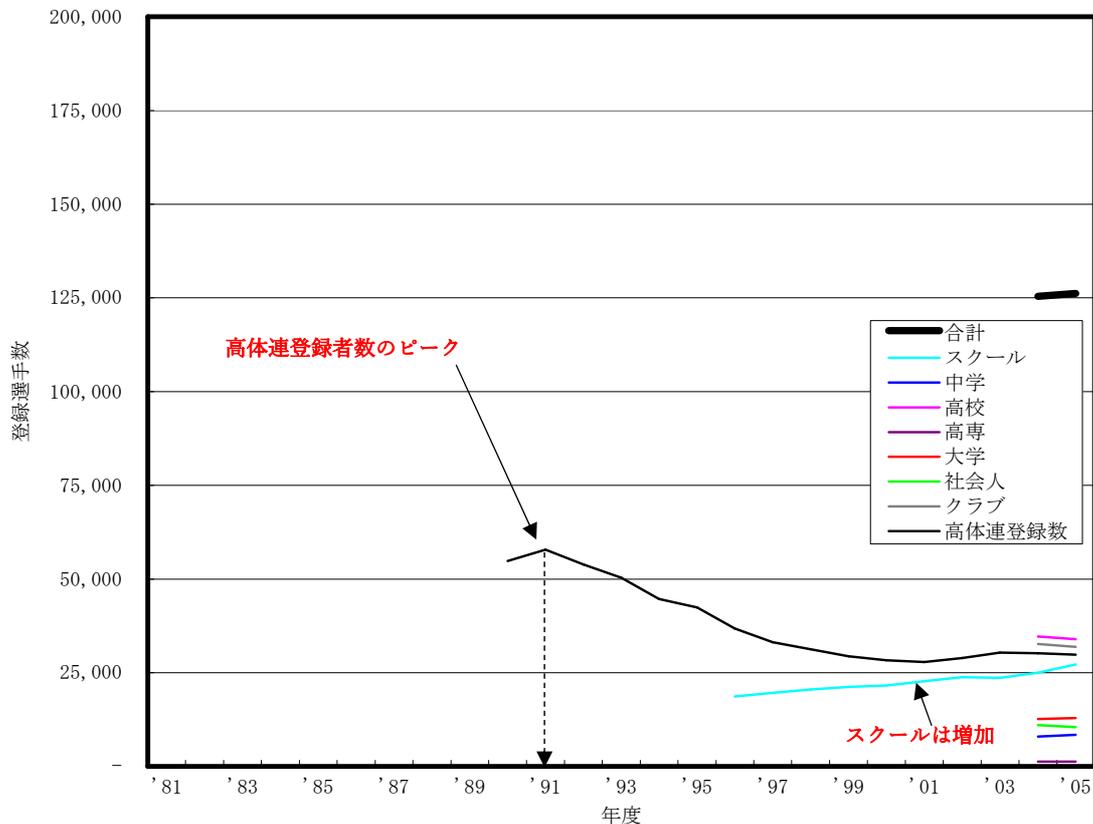
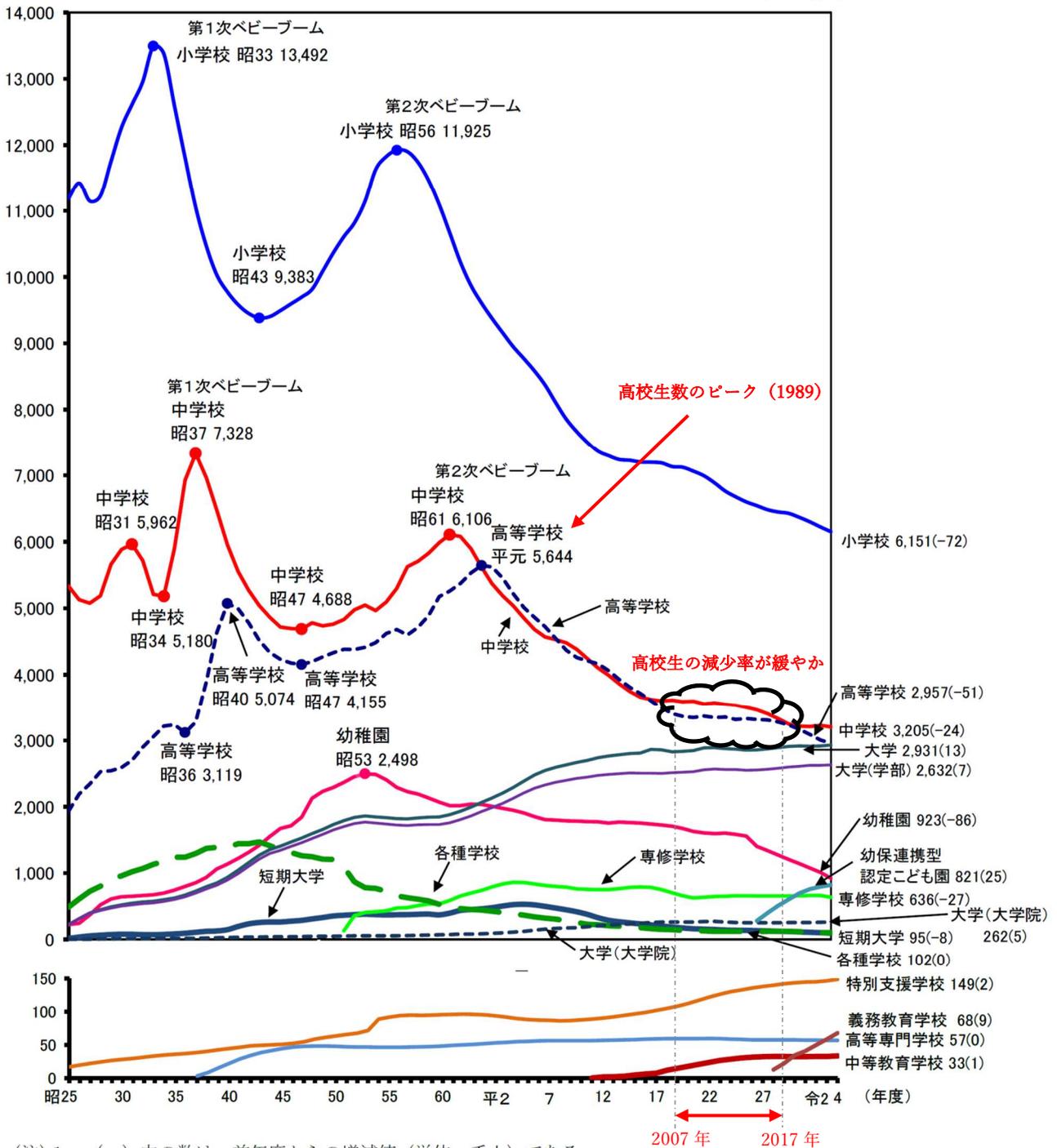


図2 日本協会登録選手数の推移 (全国のデータ) [松崎(2007)より引用し加筆]

在学者数の推移

(単位:千人)



(注) 1 () 内の数は、前年度からの増減値 (単位:千人) である。
 2 特別支援学校は、平成18年度以前は盲学校、聾学校、養護学校である。
 3 大学には、学部学生、大学院学生のほか、科目等履修生、聴講生、研究生等を含む。

○減少率が緩やか
 ⇒ 団塊世代の孫世代か?
 ○しかし2017年以降、少子化が加速

図3 在学者数の推移 (全国のデータ) [文部科学省 学校基本調査より引用し一部加筆]

参考文献:

愛媛県ラグビーフットボール協会機関誌: えひめ RUGBY

松崎伸一, 2007, ラグビー人口について, http://ehimerugby.chu.jp/02_data/report/participants_v2.pdf

文部科学省 学校基本調査: https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm